

●菅居古文書 第二卷

本書は纏きに紹介せられたる如く、河内豊田八幡宮の舊社家であつた菅居家の所藏文書を輯録せられたるもの整理・編纂は西田博士監修の下に神宮皇學館教授佐藤虎雄氏が當られたものである。

第二卷は古記録を主とし、豊田八幡宮に關する緣起、神寶目錄、日録、並に宗旨人別帳の類を收めてゐる。比較的近世のもの、徳川中期以後のものゝみであるが、社人社僧間の動靜を知る材料を提示し、特に維新當時、神佛分離の際に於ける豊田八幡宮の狀況を知るに興味深いものがある。(菊版假綴六九〇頁、圖版四葉、京都菅居正治氏發行、非賣品)(以上寺尾)

●石山本願寺日記 上卷

大阪府立圖書館長今井貫一君が在職二十五年を記念すべく出版せられたもの、從來「天文日記」または「本願寺日記」として知られて居た證如上人の日記を印刷したも

のである。それは天文五年正月より同二十三年八月迄十九年間の記事を含み本願寺門主の私生活より他家との交渉本願寺の行事、本願寺を中心とする石山六町の商業、堺その他近接都市の事情、支那商船の來航など有益の記事を隨所に發見するこゝが出来、極めて興味深きものがある。共に有力なる史料とすべきものである、本書が本願寺の經驗したいろいろの災危を免れて今日に傳はれるは一の奇蹟ともいふべく更に今回それが西本願寺藏の原本に基いて印刷され一般研究者の自由なる利用を許さるゝに至つたのは最慶賀すべきことである。附録として本願寺系圖抄及下間家系圖抄を添へたのは本文の理解の爲に極めて適切なる參考となるであらう。(菊判七〇六頁、大阪今井貫一君在職二十五年記念會發行)(肥後)

●吉田兼好筆自撰家集(複製)

兼好自撰の家集なるものは「兼好法師集」の名を以て群書類從の中にも收められてゐるが、今こゝに掲ぐる所の

ものは現に前田侯爵家に藏せられる彼が自筆の草稿本の複製である。縦七寸一分、幅五寸強、墨付五十一枚、奥書一枚白紙三枚の鳥の子を料紙とする胡蝶装一冊、表紙は鐵色印金鳳凰くづし文様の綴子、見返は金銀箔によつて霞野毛、菊花丸紋の圖案を取合せ頗る雅趣に富む」に記された原本の面影をさながらに傳へて毫末も間然する所がない。正に現代の有する技術の最高可能を示すものといふべく、永く古書古筆を愛するものゝ鑑賞に堪へうるであらう。別に添へられた解説に於いて類従本以下諸種の異本が主として、原本の改訂修補の部分が所謂ミセケチの方法による爲そのいづれの本文に従ふかに由來せるものなることを明にせるが如きは偶々かくの如き草稿本の現存すればこそよく爲し得たことであらうが、またひいて一般古典文學の本文整定上一の暗示を與へるものといへよう。(尊經閣叢刊庚午歲配本、非賣品)

●名家尺牘 第二輯

渡邊得次郎編

本誌前號に紹介せる第一輯に尋いで編者がその收藏に

かゝる先賢の遺墨中より選ぶ所、岩倉具視、徳川齊昭、藤田東湖、鶴飼吉左衛門、長岡監物、伊能忠敬、伴信友、尾藤二州等の書狀凡て十通を收む。まづ原本の寫眞を掲けその釋文を載せ、解説を加へ卷末に三浦周行博士以下數士の史論を添ふる等その體裁一に第一輯に同じい。岩倉具視のものは明治三年十二月薩長兩藩主並に西郷隆盛の上京を促す爲勅を奉じて西下せんことを時に係り、徳川齊昭以下の數通はいづれも安政元年四月皇居炎上に付その再建に盡瘁せる時に屬する。忠敬、信友、二州等の書狀みなよくその人格を反映せる中に、信友の、水戸の西野宣明に宛て、その著殘櫻錄竹榮抄その他の批正を請ひ、「七十三歳の馬齢に及び更に分陰を惜み去春上京後蓬門をも不出漫に寸志の書立を企罷在候へしも生涯何一つ可脱稿力は無之候」云々といへるが如き、殊に我々同じ道を歩むもの何人も一讀感なき能はぬであらう。(美濃判和裝帙入、非賣品)

●京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告

第十一冊

京都府史蹟勝地保存委員會の昭和三・四兩年度に亘る調査の成果を收め西田直二郎博士、佐藤虎雄學士の執筆にかゝる。内容は京都市に於いて知足院と保元亂遺蹟並に崇徳天皇御廟所郡部に於いて笠置山の史蹟及び名勝以下十二箇所に及ぶ。通説、前諸冊に比して稍々顯著なるものに乏しい感がないではないが、就中保元亂後崇敬の篤かつた崇徳院の靈社及び御影堂の、春日の末にあつたものは既に早く亡び、今に残るもの祇園歌舞練場の東にあつて日夜弦歌の聲に覆はれ何人も顧るものなきに至らうとしてゐるのは、調査の當時新聞紙にも報導されて識者の注意を引いた所、また相樂郡法華寺野に於て發掘された牆壁に類する遺跡が伴出する瓦によつて奈良朝おそくも平安朝初期のものに斷ぜられ、その構造その位置等によつて或は養原離宮趾若くは國分尼寺趾と推定されてゐるのは猶研究の餘地を残すとはいへ、十分注意さるべきものであらう。(四六倍版本文一一二頁、圖版四二葉)

〔以上柴田〕

●英米佛蘭聯合艦隊幕末海戰記

安藤徳器
大井 征共譯

佛國海軍士官 Alfred Russin の著 "Une Campagne sur les côtes du Japon" の全譯である。全篇九章に分たれ其中五章が下關砲撃從軍記、他は彼等の眼に興味深く映じたりしい日本の社會組織や、當時の國情殊に幕府の對外方針と尊王攘夷の運動の關係に就いて觀察が要領よく記されてゐる。明治維新史の究明が悉ゆる方面より要求されてゐる時本書も亦其目的のために有效なる一使命を果し得るであらう。譯文流暢單なる讀物としても興味深く通讀される。尙附録參考資料として英國公使アルコックの報告狀等二十點を載せて本文記事を補足し又其誤謬を訂正してゐる。(四六判 四一四頁、定價一、五〇 平凡社發行)〔藤〕

●近代日支鮮關係の研究

田保橋 潔著

本書も亦前書と略同時に第三輯として發行され著者が